

記念講演

講師 岡山大学文学部教授 齊藤 孝(さいとう たかし)

昭和9年4月京都市生まれ。昭和41年、関西学院大学大学院文学研究科美学専攻(博士課程)修了(文学修士)。関西学院大学専任助手、岡山大学法文学部助手、同講師、同助教授、同教授を経て、現在、岡山大学文学部教授。専攻は日本美術史。ほかに岡山県文化財保護審議会委員などを兼務。主に、日本仏教彫刻史を調査研究している。

主な著書「雪舟(日本人の国際理解Ⅴ)」「原色日本美術3 奈良の寺院と天平彫刻」「奈良六大寺大観1 3巻 唐招提寺2」(共著)ほか多数。

司会

皆様、お待たせをいたしました。ただいまから記念講演に移ります。

岡山大学文学部教授でいらっしゃいます齊藤孝先生に、「雪舟さんってどんな人!」と題して御講演いただきます。

齊藤先生は、昭和9年4月京都市でお生まれになり、昭和41年に関西学院大学大学院を御卒業。現在、岡山大学文学部教授として日本美術史を教えていらっしゃいます。たくさんさんの著書の中に、「雪舟」という本もお書きになっていらっしゃる先生でございます。

それでは、齊藤先生に「雪舟さんってどんな人!」と題して記念講演をしていただきます。

それでは、お招きしたいと思いますけれども。それでは、お入りいただきましょうか、よろしければ。

齊藤孝先生でございます。齊藤先生、よろしく願いいたします。(拍手)

齊藤 孝(岡山大学文学部教授)

ただいま御紹介にあずかりました岡山大学の齊藤と申します。

本日、こういう雪舟サミットという大きな場におきまして、御指名を受けましてお話しさせていただきますことを、私といたしまして無上の光栄に存じております。

題名が「雪舟さんってどんな人!」ということになっておりますが、この雪舟という偉大な存在の芸術家を一言で完全な意味で申し上げるとということは、もとより私の任ではございません。雪舟という者をとらえるにいたしましても、いろいろな立場からいろいろなことが言われ、それぞれにはそれぞれの正しき理由があることでございます。したがって、私のきょう申し上げるところも、私の見方としての雪舟でございますので、皆様におかれまして、そういういろいろな論との遭遇の中で、皆様お一人お一人がより正しい雪舟像というものをお作りいただければありがたいかと、このように思います。また、短時間におきまして雪舟の全体像を申し上げるということも、これまた大変なことでございますので、私は大きく2点の問題に絞りまして、私の考えを申し上げたいと思います。

その前に、総社市の方におつくりになったパンフレットがお手元に参ってると思いますが、私の今日申し上げることにしましては、10ページと11ページをお開きくださいませ、そこに挙げておりますことを参考にしながらお聞き願ひまして、また私が触れま

せん問題につきましても、後でこれをごらんいただければありがたいと思います。要するにここでは、雪舟等揚の一生の年譜をまとめておきました。そしてまた、今日雪舟の絵画作品と申すものは真偽取りまぜまして、実は恐らく1,000点を超えているというのでございます。しかもその中で、今日国が厳選に厳選を重ねまして指定をしたという作品は、このパンフレットに示しました、ただ国宝5件、重要文化財12件に過ぎません。しかし、これだけの作品が少なくとも、今雪舟の代表作とされておりまして、今後とも御注意いただきたいと思います。

まず第1に、雪舟は言うまでもなく大変有名な画家であります。その有名さかげんでございますが、先ほどの市長さんお話でも、ユネスコが彼をたたえたというぐらい、もはや今日では世界の雪舟になっているわけでございますが、それをちょっと差し置きましても、まず雪舟は、彼が生きていた時代からもう大変な人気作家でございます。しかも死んでから桃山・江戸時代を通じまして追隨者が相次ぎまして、そしてさらに今日まで画聖の名声が続いているという、芸術家としてはこんな結構なといいますか、冥利に尽きるような画家はないわけでございます。そこで我々は、まずこのように考えやすいものでございます。すなわち、雪舟がそれほど名声を持ったにつきましては、彼は当然日本の首都におきまして、首都の画壇の力によってこれほどの名を残したに違いない。雪舟がもしも地方にいたとしたら、とうていこのような名声などは得られなかったであろう、というふうに、常識的に考えると思われます。

雪舟の一つの大きな問題は、雪舟は誕生と小坊主時代を地元の総社市の地域で過ごした後、壮年になりますと、当然京都の相国寺(しょうこくじ)へ上がりまして、そこで春林周藤という師についてちゃんとした禅僧になり、そしてしかも、その相国寺におりました天章周文という、当時室町画壇におきます中央の最高の画家についたわけでありまして。そのことは間違いない。ところが、それならば彼がそのまま京都にとどまって、京都の画壇を制したかという、実はそうではなくて、彼は先ほどの年表でも寛正4年、彼が44歳と考えられる時には、もう既に山口の方へ移っていたらしい、ということでございます。それ以降、雪舟は京都の中央に帰らず、地方を流寓しております。あっちこっち、山口であるとか、あるいは大分・益田といったような所において大きな仕事をしている。ところが、そういう地方を流浪している画家であるにもかかわらず、もう京都を始め全国の入りびとが、雪舟の絵というものを慕ったわけでございます。

その実際の例をちょっと挙げますと、今寛正4年の次に寛正5年、45歳の欄を見ていただきますと、これも京都の有名な禅僧でございました 之誓鳳(こうしえほう)という禅僧が、わざわざ山口の雲谷庵を訪れて、後に『揚知客に寄す、並びに序』という文章と詩文を残しておりますが、その序文の中でどういう意味のことを言っているかと申しますと、「このごろ京都にはろくな画家がいない。しかるに、周防の山口に雪舟がいるということは・・・この場合雪舟とは言わず雲谷等揚(うんこくとうよう)と呼んでおりますが、

・京都のちまたのうわさにも及び、児童・走卒の端に至るまで知らない者はないほどである」と、このよ

うにたたえているわけでございます。この雪舟は40代に山口におりますけれども、後すぐに入明をいたします。応仁元年から2年、48歳・49歳というところに滞明し、帰ってきたのが50歳ごろであります。それから後大分や益田をめぐり、これはまたいろいろな学説があって難しいんですが、その流浪の果ては松尾芭蕉をしのぐのでございまして、彼はずっと東海道を下り、富士を見て奥州に行き、一説に山形の立石寺まで及び、それから北陸経由でこっちへ帰ってきて、そして67歳のときにやっと周防に戻ってきて、終生の住居を山口に定めるわけでございますが、その後半の山口の時代になりますと一層、全国から雪舟を慕い、雪舟の弟子になるという画僧が殺到いたしまして、「雪舟派」というべき画系ができて上がるような情勢になりました。

今、その中の1人だけ、重要な人物を御紹介いたしておきます。それは、この11ページの明応4年、雪舟76歳の部分と、それから明応8年、雪舟80歳のところを参照されながら聞いていただきたいと思いますが、雪舟の弟子に如水宗淵（によすいそうえん）という弟子があったのでございます。ところが、如水宗淵という人は、実は有名な鎌倉円覚寺の禅僧でございまして、しかも蔵主（ぞうす）という禅僧としては高い地位にいたわけでございます。

ところが、10ページの上から3番目、文安4年～寛正3年の28歳から43歳という欄へ戻っていただきますと、その欄に雪舟は京都相国寺で春林周藤について修行したと、その次に、「知客（しか）という役職を勤む」と書いてございます。ところが、知客は禅僧として余り高い役職ではございません。すなわち、これほど有名な雪舟であっても、禅宗界では甚だ出世ができず、実は一生知客であった人であります。一方、蔵主は非常に高い役職である。したがって、なるほど雪舟の方が年上には違いないですけれども、名誉から言う弟子の宗淵の方がはるかにぬきんでている。それにもかかわらず如水は、鎌倉にいながらはるか周防の山口の雪舟を慕いまして、自分の地位・名誉を捨てて、山口の雪舟の下へ身を投じたわけでございます。

当時の鎌倉は、鎌倉幕府はないとはいえ、室町時代では関東管領のいる、東国でやっぱり中心地でございます。したがって、鎌倉五山諸寺には、いっぱい優れた水墨画僧の集団がある。それから、もちろん京都では、周文派と言われる中から室町將軍家の御用絵師になった小栗宗湛（おぐりそうたん）その次には宗継（そうけい）というふうに続きますし、大徳寺派の方からは曾我墨溪・蛇足など、曾我派の系譜も出てくる。また、足利將軍義政の時代には、後に桃山・江戸時代の中央画壇を支配します狩野派の祖、狩野正信（かのうまさのぶ）が立ってくるというように、之翬鳳が「京都にはろくなやつはおらん」と言ったのは、どこまでも言葉のあやで、京都の水墨画壇というものはやっぱり隆々としております。したがって、如水宗淵がその気になったら京都に上がってもいいわけであります。

それを京都も蹴飛ばしてはるばると山口の雪舟のところへはせ参じたということが、雪舟という人物の存在を考えますときに、非常に重要なものを持っていると思います。

そして、もちろん雪舟としても、鎌倉の蔵主の役を務める高僧が、わざわざ自分みたいな風流僧、雲谷庵という庵に住んでいるような人間の下に飛び込んできてくれたというので、大変この弟子を愛しました。そして、宗淵が画の修業を終えて、改めて師の雪舟に「これから再び円覚寺へ戻ります。おいとまをしたい」と申しました時に、現在東京博物館にございまして、雪舟の代表的な国宝絵画でございまして『破墨山水図』を描き与えたわけにございまして。そしてなお明応8年には、鎌倉から如水宗淵が師匠に消息を送ったその返事を書いた手紙が残っておりますが、その手紙の中身を読みますと、当時宗淵は、どうも政治に絡んでどっかの合戦に引っ張り出されかけておったようであります。それがどういう戦争かわかりませんが、そのときに雪舟が「今、天下は乱れかけておる。だから、こんなときに政治や合戦に下手にかかわったら身が危ないよ。わしらはしょせん画家であり、芸術家は純粋に芸術の道に生きるのか本文ではないか。だから、便船があったら山口へ来い。一緒に絵を描こうではないか。自分ももう80歳になって老い先短い。どうかもう一度あなたに会いたい」という切実な手紙を送っているのです。で、まず今申し上げたその『破墨山水図』と手紙をスライドで見させていただきます。〔スライド〕

これが今申し上げた『破墨山水図』でございまして。何か抽象絵画が描いてあるようにお思いかもしれませんが、そんなことないんで、これは自然の景色がちゃんとかいてあるわけで、遠く霞の向こうの遠山が、そしてここに崖がある。崖下に一群の漁村といいますが、村がありまして、そしてこのあたりが江水になっておりまして、ここに一艘の舟があって人が乗っているという、これは一つの普通の山水図と言われる風景画なんです。そう思って見ていただいたら、簡単明瞭な筆で、その自然をぱっと端的にとらえていますね。この雪舟の絵の描き方、画体というものが、書道の楷書・行書・草書になぞらえまして、草体の絵と申します。すなわち、これは雪舟のかきました草体水墨山水の代表作でございまして、あわせて自分の弟子に「絵とはこう描くもんだ」と、印可を与えると同時に模範を示したものでございまして。

次に、絵の上であります、雪舟が直筆で、その絵をなぜ宗淵に与えたかということを書いている。大体、雪舟の筆跡は、絵に「雪舟筆」とかというようなサイン、落款（らっかん）と申しますが、サインの字はいろいろあるんですけども、雪舟の直筆の文章というのはほとんど残ってないんです。で、これはその意味で雪舟の直筆の書体のわかる数少ないものでございまして、前半は如水宗淵が自分の下で修行して今帰るのに、「ぜひ師匠の絵が欲しい」と言ったのでかいた、ということが書いてありまして、次いで自分が明に渡った時に、特に李在と張有声について学んだことを初めて明らかにし、そして、自分は明で修行したけれども、明国の絵はどうも自分としては余り良いと思わない。明国へ行って帰ってきて、初めて自分の師匠である如拙と周文の両翁が、いかに巧みな画家であったかということを見つけた。とこういう文章を残しております。はい、次。〔スライド〕

もう一つ雪舟直筆の手紙が残っておりまして、梅沢記念館の『雪舟尺 』(せっしゅうせきとく)であります。この中身が今申し上げたことが書いてあるんで、「その方御弓箭に及ばれ、迷惑察し奉り候」という文章がございます。そして「余り毀誉褒貶を気にして世俗につき合うて、政治にかかわったらえらい目に遭うからやめておけ」ということ、「画道一心でやれ」ということはこの辺に書いてあるんです。(それぞれ消息の行を指す。)そこでひとまずスライドを終わりにして、また次の話に移ります。

このように、まず雪舟は「地方の人」でございました。で、これからちょっと申し上げることは私の専門外のことになりますんで、差し障りがあるかも存じませんが、私が今日の講演の御依頼を受けましてから、いろいろ考えておりました時に、たまたま先だって、NHKが最近の地価高騰に対するシンポジウムを連続4日間にわたって放送しましたが、その時に、なぜ東京にあれだけ人々が集中して、地価高騰が起こってえらい騒ぎになるのか。そしたら、その首都の権限を地方にもっと分散してはどうか、という話がありました。その時、たしか堺屋太一さんではなかったかと思うんですが、「どうも最近はあらゆる情報の発信基地が東京1になってしまって、そこでもう嫌でも皆東京へ集中するんですね。だから、遷都とかなんとか言う前に、とにかく地方にいろんな情報基地をおこすことが必要で、そしたら自然に首都機能の分散が可能になりはしないでしょうか。だから、地方も何とかそういうことを考えるべきです」というようなことをおっしゃっていたのを、ちょっと記憶に残すわけでございます。するとですね、雪舟という人は自分の独力で、この絵画界に、京都・鎌倉とは別に発信基地を、地方につくった存在と言うことになります。これが、現代の場合に徴しても、非常に注目すべきいろんな問題を含んでいるのでないか、と思います。

それなら、そのような雪舟を評価しますのに、「やっぱりそういうことができたのは、雪舟が偉い天才だからである」と言ってしまうと、事は簡単でございます。けれども、それでは一人雪舟という天才が出たから、そのようなことが可能であったのかというと、そうともやっぱり言えないと思います。むしろそういうことが許されるような時代の背景があったと私は思います。

まず雪舟が京都の相国寺に行きました時には、彼は間違いなく禅僧として成功することをはっきりと思っていた。禅僧として偉い地位にもつきたかったし、禅僧としてまず認められたかった。ところが実際には、彼は画家としてなら大変認められたんですが、優れた禅僧としては周囲がどうも認めてくれなかったのであります。で、地位としても知客にとどめられていたわけでありまして。それでは、知客に不当にとどめられたのか、ということでありまして、それには、また次のような問題を考えておかなければならないのであります。

それは、相国寺というお寺は、当時の室町将軍家の外交・政治の顧問寺院でありまして、要するに禅僧というのは大変な学者ですから、当然先ほどの如水宗淵のように、武家のブレインに招かれることが多いのです。また、いかに禅僧といえども、単に座禅を組んで、世の中の利欲を超えて純粹に悟りを開こうというようなことじゃ、第一大きなお寺は経営

できないんです。大きなお寺をやっていくときには、やっぱり好むと好まざるにかかわらず、禅僧でもそういう所へつながっていかねばならない。特に相国寺はそういう立場の寺なんです。したがって、禅宗の中でもやっぱり政治力、経営力と、世故に同時にたけているような人物が、実際には必要になってきたのです。

それから、そういう相国寺みたいな大きなお寺は、将軍家とか貴族とかに対応するわけですから、向こうはそれだけ身分が高いんですから、こっちにもそれに見合う出自・家柄がやっぱり求められてくる。したがって、禅寺内にも一種の門閥化が嫌でも起こったわけです。それは何も相国寺だけではございません、大徳寺でもどこにでも及びます。そうすると、当然禅僧の中でも、禅の悟りを純粹に学問的に探求し、修行をする正統派は、現実の寺内のあり方を批判するわけです。「何じゃ。禅宗こそと思うのに、禅宗よおまえもか！それなら自分こそ真の禅徒になり、禅の真髓を背負う」と言うて、本山を蹴飛ばすような気概の禅僧も出てくるわけで、例えば、その最大の人物が彼の一休宗純（いっきゅうそうじゅん）でございます。一休さんとはそういう人です。このように、在野でやる禅僧を林下（りんか）と申しますが、そのほか林下の禅僧として有名なのは、例えばこの岡山より出て永源寺派の開祖になりました寂室元光（じゃくしつげんこう）がおります。そして、どうも雪舟もまたこのような林下の道を選んだようでございます。それが彼をして流浪を余儀なくさせた理由になろうかと思えます。

ところが、先ほどの一休も、寂室元光にいたしましても、またこの雪舟等揚にいたしましても、何も当てなく飛び出してのたれ死にしたら何もなりません。だれも支援してくれる人がなかったら、もしもみんなが中央にあこがれて、「中央こそ偉大。中央から離れたやつはあかん」と捨てるようなことだったら、飛び出してみたところで一休も雪舟も成り立たないわけでございます。

ところが、ちょうど一休禅師と言ひ、雪舟が生きておったその時代の室町時代とは、尊氏とか義満といったような人が立てた、隆々たる室町幕府の時代は過ぎ去って、中央の権力は弱くなり、むしろそれを支える幕下の守護大名が力をつけて、場合によっては、適当に将軍家を操って、むしろ彼らが明日の天下をねらうような時代になってきておりました。ということは、中央集権でなくて地方分権の世になってきた。そうしますと、そういう地方大名も、例えば大内氏などが六分の一家衆と言われるような大きな勢力を持ってまいりますと、当然自分の城下を京都と対抗するような町に仕上げたい、と思うようになります。それは何も大内氏だけじゃない。例えば越前の朝倉氏、その他もろもろのところもそういうことを考えている。そうしますと、中央で有能であるにもかかわらず不遇に終わった人びとを、彼らはいつでも自分の所へスカウトして育てるといような風潮が、この室町時代の後半期に起こってきたのです。したがって、雪舟はその意味でも、例えば山口に一つのコネクションができれば、それを支えてくれる地方の人びとを頼りとして、そこで絵画三昧にふけることができる。それがこの場合、重要な点ではなからうかと思うわけでございます。

次に、室町將軍家の權威が落ちてきたということは、中性の室町時代が終わりに来かけているということ、同時にその向こうに、いずれ来る桃山・江戸時代がほろほろと見えかけている、ということです。ここが重要なことなんです。すなわち、室町時代の本流が支えたのではなくて、むしろ次の時代を意識しかけている人びとが雪舟を支えた。この点に御注目していただきます。これが、実はこれから申し上げることの伏線になるのでございます。

次に、2番目の問題といたしましては、雪舟はなぜ画聖となり得たか、ということでございます。「何か知らないけれど、雪舟はうまい絵を描いたから画聖」というような、これまた単純な問題ではございません。「だれが雪舟を画聖にしたか」という問題もあります。この点について、実は私が山陽新聞の10月19日付けに、ちょっと書いておきましたので、これから後半の部分というのは、ここの記事と関連をしておりますが、雪舟の絵というのは、要するに水墨画でございます。これは墨絵とも申します。墨絵は鎌倉時代の末、大体14世紀の末ごろから日本へ入ってきまして、そして禅宗世界に広がり、雪舟を含めまして、雪舟の師匠分の如拙、周文、あるいはそのほか大体室町前半期の日本の水墨画家というのは、全部禅僧でございます。したがって、雪舟も禅僧としての水墨を描いているわけでございますから、雪舟のかく水墨画というのは、何らかの意味で彼の禅的な内容、彼の禅機というものを表現したものではないか。したがって、そのすばらしさの中に雪舟の悟った禅の境地を読み取らんといかんのだというような考え方。それから、雪舟は室町時代的水墨画家であります。室町時代こそ禅宗系水墨画僧が最も活躍した時代でありますから、雪舟の絵とは、まさにその室町時代的水墨画様式を代表していると、そのようにやや受け取られている一面がなかろうか、と思うわけでございます。

ところが、私は少し、これとは違った雪舟観を持っているのであります。まず、雪舟が画家であると同時に深い禅徒である、という考え、あるいはそれへの期待も含めて、そういう観念で雪舟を見るということは、これは何も現代のみならず、相当前から行われてきたことでございます。例えば、私も実は『総社市史』の美術編にちょうど雪舟のことを書かしていただいた一人でございますが、宝福寺にございます有名な雪舟碑、あれは要するに、吉備津神社の宮司家の出身で、江戸時代きっての国文学者の一人でございます藤井高尚が選文した文章でございますが、その中で「雪舟は世に画家としての名声ばかりが喧伝されている。けれども、雪舟はやっぱり偉大な禅僧であつても、もっと禅徒としての雪舟というものを高う考えといかん」と彼は書いてるんですね。まさに、そこに人びとの雪舟への期待の一面が出ています。で、私はここで禅徒であるところの雪舟を、あえて否定する気持ちはございません。雪舟も禅僧としてそれなりのことはあつたでありましょうし、そのあり方をどのように考えるかという点は、いろいろあるわけでございますが、彼の生きておりました室町時代当時の友人である五山の名僧が、雪舟をどう見ておつたのかという問題がございます。これを一々挙げると大変でございますが、一人重要な人物を

御紹介いたします。

それは、このまた年表を見ていただきますと、文安4年～寛正3年のところ、「諱（いなみ）等揚」と書いてございます。この「等揚」というのは、およそ禅僧が寺へ入って修行いたしますと、直系の師からつけられるところの僧としての本名、まさに戸籍名のようなものであります。

そこでまず、諱、本名がつけられますと、それに続いて道号というものをつけることになっているんです。これは、かなり自分で好きな名前がつけられるようでございます。そこで雪舟は、最初から「雪舟」という号を使ったのではなくて、初期には「雲谷（うんこく）等揚」と呼ばれていた節がございますが、この文正元年、47歳の時、すなわち明へ渡る直前でございますが、そこに書いてございますような理由で、彼は初めて「雪舟」という号を上へつけて、「雪舟等揚」と名のりました。ついでにまた申しますが、この「号」は別に芸術家の雅号としてつけたのではございません。あくまでも自分は禅僧であり、諱があって上に号をつけるのは、禅僧として当たり前やること。ですから、あくまでも禅僧の号として「雪舟」と名付けました。しかし、これにはちゃんとした名付け親を立てまして、その名付け親に、号をなぜこういう名にしたかという証書を書いてもらう。それを「字説」と申しますが、したがってこの場合、雪舟という名の由来、禅の思想との関係をちゃんと解説する『雪舟二字説』という文章が、残っているのです。それを書いたのは、龍興真圭（りゅうこうしんけい）という禅僧でございます。

ところが、この中身が大変おもしろいので、龍興真圭はその文章の中で、「雪舟は将来、非常に見込みのある禅徒である」ということは、不思議にもちっとも書いてないんです。で、何を言っているかといいますと、冒頭に「雪舟は大変な能画家である」とまず歌いあげ、「雪舟」の二字をむずかしく禅的に解釈した上で、「今、私が説いたような禅の精神、禅の奥義をおまえが身につけるならば、おまえの絵はますます深まるであろう」と言うんです。「悟って高い禅僧になる」と書いてないんです。室町時代の周囲の禅僧自ら、とにかく画家であっても高い禅僧とはちっとも言ってないこと、これがおもしろいんですね。ここがやっぱり、雪舟がいやが応でも知客にとどまざるを得なかった理由があり、またそうであるからこそ、ますます雪舟は、生涯の一大事を画道に据えたと思われるわけでありませぬ。

また事実、雪舟は物すごい人気作家になった。そうしたときに、実はここがまた重要なんですが、雪舟の絵を盛んに求め、雪舟を支えた人びとにどういう階層がいたか、ということ。雪舟は明から帰りまして、大分に一時おりました。そのアトリエを天開図画楼（てんかいずがろう）と、あるいは図画楼（とがろう）という人もおりますが、名付けております。もっとも、これは何も大分のアトリエ名ばかりでなしに、彼が山口に最終的に定住した後の雲谷庵の画室にも「天開図画楼」と名付けておりますが、それはともかく、豊後の地にいる雪舟に、わっと全国から人が絵の注文に殺到して、もう応接のいとまはなし、というような状況になったということが、呆夫良心（ばいふりょうしん）という人の

書きました『天開図画楼記』に見えております。呆夫良心というのは、一緒に明に留学した仲間でございます、その彼が応仁・文明の大乱で世の中ひっくり返っているときに、雪舟が大分という場所で画道に邁進しておるということを非常に喜びまして、はるか中央から彼をたたえる文章『天開図画楼記』というものを書いて送ったわけでございます。

その『天開図画楼記』は文明8年、57歳の雪舟に送っているわけですが、その中で、彼のところへ殺到した人びとは、上は「公候、貴介」、すなわち貴族や武将です。しかし、これはわかりますな。当時として。それから、下の一人は僧がいると。これもわかりますね、当たり前ですな。で、話がここでとまってたら当たり前なんです。ところが、次にさりげなく書いてある4文字ほど、そこへ目をつけんといかん。何が書いてあるかといったら、「工商の徒」が絵を求めてきた、と書いてあるんです。これが重要なんです。というのは、少なくとも雪舟の師匠の如拙、周文が生きていた時代は、この水墨画というものが禅宗世界の中だけに通用していて、一般にはまだわからんのです。それが次第に、室町幕府とか、幕下の守護大名とか、という有力武士の方向へ広がってきて、さらにそれが一部の上流インテリ階級だけのものから徐々に徐々に外へ出てきて、この時代になって商・工階層まで広がったということになる。この商・工業者こそ、これから資本を蓄積していったって、実は桃山・江戸時代を開く明日の階層なんです。すなわち土地経済に結びついた農民や武士というのはまさに中世的な人間でございます、次の近世ではないんです。桃山から江戸時代は、例えば織田信長、豊臣秀吉、徳川家康と続いて武士が天下をとり、武士が支配する封建体制を築き上げた時代である。と思っておられるとちょっと違いますが、実際には商業資本、まだ手工業の時代ですから、工業資本が勢力をとるまでにはいかんまでも、商業資本主義の時代に入ったのです。したがって、言うならば歴史の中からそっちへ行こうとしている連中が雪舟の絵を支えたということなんです。

そうしますと、水墨画というものが単に禅的精神主義を標榜しておるだけでは、もとよりそんな難しいことを要求していない一般社会が受け入れるはずがないということですね。むしろ、彼らに訴えるものは「感覚」であります。高踏的な「精神」じゃなしに「感覚」であります。だから、室町末から桃山・江戸時代の絵画史とは、精神主義から改めて感覚主義の絵画が開いてきた流れなんです。その過渡期に雪舟がいるということを知っていたきたいのであります。

しかし、その過渡期としての雪舟の持つておる一種の感覚主義は、桃山・江戸時代の感覚主義とはまた違います。まさに雪舟固有の、雪舟ならではの独特の感覚主義なんです。この感覚主義としての雪舟の絵画が、これからまた改めてスライドでお目にかけますけれども、わかっていただけるかどうかの問題なんです。雪舟というのは、ちょうど「ピカソが天才が気違いかわからん！」と、皆さん目を回しておっしゃるように、雪舟の絵をこれからごらんに入れますが、「うーん！」と感心される方と、「それほどでもないな！」とおっしゃる方があるだろうと思います。「なぜこれが画聖と言われるのか？もうちょっと違う

絵で画聖と言われる人があってもいいではないか？」と。それくらい実は雪舟という人は個性の強い人なんです。それを、感覚主義へ移っていく絵というものを説きながら、あわせて他の絵と比較しながら、雪舟の芸術とはどういうものか、ということ、ちょっと説明させていただきます。したがって、スライドを両方2面同時に映していただきます。

で、雪舟の「最も雪舟的な絵画」というのは、これもいろいろ見方がございますが、私は現在東京国立博物館に入っております国宝の『秋冬景山水』と言われるこの絵をまずお示ししたいと思います。この絵を見ていただきますと、仮にこの絵から、先ほども申しましたような、例えばここに禅の何か、あるいは高踏な精神というものを感じようとされた方にお尋ねしますが、この絵に果たして深い潤いのある精神的な豊かな何かを感じられますか？。何か知らんけどガサガサしてないですか。そして、すべての墨描が強くて、ガチガチと形どってあって、ぼけたところがなく、それだけ形がはっきり明晰であります。そして、一つ一つの岩、木、楼閣というものが、精神的で有機的な表現というよりも、まるで幾何学的な無機的な形となって、グワッと迫ってまいります。すなわち、すべてがズバツと単純に割り切れているんです、この絵は。そういう感じがいたしませんか。

ところで、水墨画というものは中国から来ておるわけでございますから、中国で描かれたある種の最高の山水画の一部をお目につけます。この絵は、一説に胡直夫（こちよくふ）という人の絵ではないかと言われている宋代の画であります。これは京都・南禅寺の金地院（こんちいん）に伝わったもので、『四季山水図』です。雪舟の方も四季山水の秋景と冬景の2幅が残っているんですが、胡直夫の方は四季のうち3幅残っておりまして、金地院と身延山久遠寺（みのぶさんくおんじ）に分かれて持たれています。こちらを見ますと、例えばこの樹木でもさすがに雪舟よりもうまいですね。リアルに描いてあります。この岩のぐあいも雪舟のようなガチガチした岩ではなしに、本当のリアルな見事な岩が、実に丁寧な筆致の画技で描いてある。人物もまたしかり。老荘思想で言います理想の高士が、悠々とこの大自然の大空を眺めている。その眺める先、大空の向こうに、実は2羽の丹頂鶴が小さく舞っておるんです。この丹頂鶴自体が心の象徴にもなりましょうが、これを見上げている高士の姿は、ただ単なる写実以上に、まさに高雅の情が我々の心を打つではありませんか。うまいですね。これが中国の絵なんです。それに対して雪舟画の方は、そういう情の深さというよりも、形そのもの、厳格な無機的な形そのものの迫力で押してくる。

〔スライド〕次は東京の静嘉堂文庫が持っています『江頭泊舟図（こうとうはくしゅうず）』と言われる、馬遠（ばえん）という人の中国南宋の画ですが、実は雪舟は馬遠という画家に大変私淑して、馬遠の絵を学んでいるのです。これもやっぱりうまいですね。いわゆるうまいんですよ！。はい、次。〔スライド〕それから、この『山水図』は、先ほどの馬遠（ばえん）の同僚でございました夏珪（かけい）という人の絵なんです。ですが、この夏珪の絵は、例えば雪舟と同じようにかいてあるようでも、何かこう潤いが深いですね。はい、次。〔スライド〕これが、雪舟が明に渡りまして直接学びました李在という人の山水画です。

はい、次。〔スライド〕そして、これが雪舟から申しますと、師匠のまた師匠、如拙（にょせつ）という人のかきました、退蔵（たいぞう）院という寺にございます有名な『瓢鮎図（ひょうねず）』という絵でございます。これは、まさにつるつるの瓢箪（ひょうたん）で、ぬるぬるの水中のナマズが押さえられるやいかに、という間違いなく禅の考案をそのまま絵にした禅機画でございます。しかし、雪舟の方は単なる山水です。

〔スライド〕これが直接の師匠でございます周文の絵で、『水色巒光図（すいしょくらんこうず）』と呼ばれる山水画です。これも画技の点もそうでありまして、全体に潤いがありまして、この大自然の中に庵を結んでおる僧侶の、言うなれば精神、大自然の持つ老荘的な理想郷が描かれている。〔スライド〕さらに同じように村庵靈元賛（そんあんれいげんさん）の『竹斎読書図（ちくさいとくしょず）』というもの、これは東京博物館にありまして、国宝でございます。これが師匠の絵なんです。しかし、雪舟は余り師匠の絵に似てないということは、同時に雪舟は単なる師匠のまねをしてるんじゃないし、師匠から学んだものからまさに自分の絵をつくっている、ということでもございます。はい、次。〔スライド〕これが雪舟の冬景図の方で、幾何学的な形の力というもので押すという、雪舟の芸術性がますますよく出ております。〔スライド〕

さて、雪舟に禅を主題にした絵はないかと拾ってみますと、愛知県の斎年寺（さいねんじ）というところに『慧可断臂図（えかだんぴず）』という絵がございまして、これは、有名な達磨大師が面壁9年の行をしております時に、慧可という僧が来て「ぜひ弟子にしてください」と頼んだんですけれども、面壁9年の行の最中で、壁だけ見て見向きもせず、取り合ってくれないので、遂に慧可は自分の左腕を切って、血のしたたる自分の腕を突き出して覚悟のほどを示したので、それにほだされて、達磨は慧可を弟子にして、禅の印可を与えた。すなわち、禅宗は達磨が初祖で、慧可が二祖である、ということでもございまして、それを描いているんですから、これはもう間違いなく禅画でありますね。ところが、岩のかき方もさることながら、達磨が横向きにぎろっと目をむいた図というのは、雪舟が実は元の顔輝（がんき）という人の絵の画風をまねて、描いたものなんです。その元の顔輝の描きました『鉄招仙人図（てつかいせんになず）』の横向きの仙人を見ますと、雪舟の達磨が彼から如何に影響を受けているかがわかりますね。ところが、顔輝の描きましたこの岩、この人物の表現、リアリティーのうまさ、しかも単に写實的でない。やはり鉄招仙人という怪物の精神が生き生きと迫ってくる。一方、雪舟の方も達磨という人間がかいてあるんですけども、人間的な精神を持った達磨ではなしに、むしろ達磨もというモチーフを持った巨大な形が迫ってくる。この岩も、岩の持っているリアリティーというよりも、岩というものの形の力が来るわけです。以上述べたことからして、雪舟の絵とは、一面で精神を感じ取らなくても、この形の感覚を素直に受け取ったらいい、という一面がある。ただ、今申しましたように、雪舟のこの強い個性に見る方に嫌気が差すのか、素直に感覚で受け入れるのか、これはそれぞれの方のお考え次第でございます。

私は先に、彼は感覚的な絵を描くようになった、と言いましたが、雪舟は『四季山水花

鳥図(しきさんすいかちょうず)』というものの創始者でございます。〔スライド〕これは、今文化庁に入りました雪舟の代表的な『四季山水花鳥図屏風』でございます、ここではこういう鳥とか、木とか、花とか、という花鳥というものが絵の主題になってきてる。「山水」というものは、場合によっては単に鑑賞の対象ではなしに、やはりそこに高い精神の理想を見る対象でもあったかもしれませんが、「花鳥」になりますと、これは文字どおり我々の喜び、人間的感覚でとらえられるものであります。この屏風の向かって右隻(うせき)が春と夏。左隻が秋と冬になっている。雪舟がこういう絵を始めますと、次の桃山時代には当然この雪舟画が影響しまして、〔スライド〕これは長谷川信春(はせがわしんしゅん)の『山水花鳥図屏風』で彼は後に等伯と名のつた人ではありますが、等伯は「雪舟五代」を称した人でもございます。なお、屏風は、岡山・金川の妙覚寺(みょうかくじ)にございます。次に。〔スライド〕これも品川家本(しながわけぼん)と言われる同じような屏風絵です。これの次行ってください。〔スライド〕これはものずごうきれいになりましたが、これは狩野派の二代目、古法眼元信(こほうげんもとのぶ)という人の描いた「花鳥図屏風」でございます。この華麗な金地着色画は、ますます純粋に我々の感覚の喜びの絵になっています。〔スライド〕

先ほどの長谷川信春は、中年以降長谷川信等伯(はせがわとうはく)という名に変わりましたが、彼こそ桃山時代におきまして雪舟の絵を受け入れて、みずから雪舟五代を名のつた人で、その落款(らっかん)の例です。はい、次。〔スライド〕それから、山口の雲谷庵に雪舟画系ができますと、やがてこの系統は、山口の萩藩の御用絵師に続く「雲谷派(うんこくは)」を形成いたしますが、その雲谷派の初代雲谷等顔(うんこくとうがん)が、やはり「雪舟末孫」を唱えて雪舟画の桃山・江戸時代への継承を標榜いたします。

ところが、先ほども申しました狩野正信から元信、そして狩野永徳、光信、孝信、探幽(たんゆう)というふうに代を重ねる間に、狩野派はやがて桃山、江戸時代を通じて、徳川幕藩体制のお家の絵になりました。そして、特に、武家の力を示すために、雪舟系の水墨画というものを継承し、それを大名居城の襖絵やら何やらにどんどん描いて、封建体制の権威を裏付けようとした。で、当然探幽もまた雪舟系の絵を描いたんですけども、いかんせん時代が変わっておりました。江戸時代とは、実は商・工業が発展したと言いましたね。商・工業はどこで発達するか。都会で発達するんです、都市なんです。では、都会人はどうなるのか。頭は切れて、センスは良くなりますが、野人的な力を失っていく。今、日本人の現在のありようを考えてみてください。探幽は一生懸命雪舟をねらい、何とか雪舟の力を自分のものとして、と思ったんですけども、これだけの広い画面を扱いかねて、こんなところに空白ができて、ここに雲霞を引いて処理せねばならん、と言った画に何か消極的で倭小な性格が、どうしてもものぞいてくる。〔スライド〕で、雲谷派も同じことでございます、これは江戸時代初期、寛永ごろの二代の雲谷等益(うんこくとうえき)の『水墨山水屏風』で、雪舟の画風を継いでるんですが、画面いっぱいにあるだけの力を表現したというよりも、やはり温和な余白の美になっています。これだけ消極的なんです。

もうあの力が表現できないんです。そういうことを自覚すればするほど、彼ら江戸時代の画家から見て、雪舟はまことに偉大な存在になったのであります。

こうして、江戸時代を通じまして人びとは雪舟を画聖とたたえ、そしてそれは昭和の現代に及びました。それでも我々は、この「雪舟」の名を世界という大きな舞台に乗せた時、この世界の目から見て雪舟の評価はいかかなものか、と不安に思っておりましたら、先ほど総社市長さんもおっしゃいましたように、ついにユネスコが「雪舟は世界の画家である」と認めたのであります。この事を最後に申しあげて、本日の私のお話を終わります。御静聴ありがとうございました。(拍手)

司会

ありがとうございました。

第1回雪舟サミットの記念講演、岡山大学文学部教授でいらっしゃいます齊藤孝先生に、雪舟の大変興味深いすばらしいお話をいただきました。齊藤先生、本当にすばらしいお話ありがとうございました。

それでは続きましては、皆様方にこれから雪舟のビデオをごらんいただきたいと存じます。

「画聖雪舟の生涯」というタイトルがつけましたこのビデオは、総社市がふるさと創生1億円事業の一環として、郷土理解を深めるために、また本日の雪舟サミットに間に合わせようと、1年がかりで制作したものでございます。もちろん初公開でごらんいただきます。上映時間の方は約27分ほどのものでございますけれども、準備ができ次第、雪舟のビデオ「画聖雪舟の生涯」を皆様方にごらんいただきます。

ビデオ「画聖雪舟の生涯」上映

司会

皆様方、いかがでしたでしょうか。初公開で皆様方にごらんいただきました。「画聖雪舟の生涯」をごらんいただきました。

本日の雪舟サミット、休憩なしで進めさせていただいて大変恐縮ではございますけれども、時間の都合上、これより本日の最後の日程となりますシンポジウムに移らせていただきたいと存じます。